

平成21年6月3日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008年

課題番号：18530384

研究課題名（和文） 地域社会における異質性受容に関する社会学的研究

研究課題名（英文） A Sociological Study on Diversity in a Local Community

研究代表者

仲野 誠（NAKANO MAKOTO）

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：60301719

研究成果の概要：山形県戸沢村には、「後継者対策」（「嫁不足問題」の解決策）として1989年に村行政主導の「国際結婚」が始まって以来、中国・韓国・フィリピン出身の女性が30余名暮らしている。それ以来、この20年間の同村の「国際結婚」やそれに伴う多文化主義的政策が注目されているが、この地域には昭和初期からのキリスト教徒の受入れ等「異質なる者」を受け入れてきた歴史がある。今日の異質性受容はこのような歴史的な文脈で考えられることが重要である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	480,000	3,480,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：地域社会、異質性、地域づくり、国際結婚、キリスト教

1. 研究開始当初の背景

山形県北部に位置する戸沢村は「村の国際結婚」（フィリピン・韓国・中国からの外国人女性配偶者の受け入れ）と外国人住民に対する多文化主義的政策でよく知られているが、その背景には昭和初期の恐慌時のキリスト教の受容など、歴史的な異文化受け入れの背景があることが筆者の調査でわかっていた。

筆者は同村の史資料の収集と同時に、韓国人女性配偶者およびキリスト教徒への聞き取り調査を重ね、データの収集に努めた。そしてキリスト教徒たちへの聞き取りを重ねていくうちに、昭和初期の賀川豊彦らによるキリスト教の社会運動の流れの中における彼らの具体的な歴史的活動が明らかになりつつあった。それと現在の国際結婚とが無関

係ではなく、むしろ強い結びつきを持っている可能性があるのではないかという仮説が立てられていた。

2. 研究の目的

往々にして「村の国際結婚」という観点からしか着目されてこなかった当該地域における異質性受容の問題を、まず地域社会の歴史的考察の遡上にのせる。そしてそれによってより大きな社会変動時における「よそもの」の役割、多文化主義的思想や政策を生み出す条件、そしてさらにはその可能性と限界についての考察へと抽象化を試みる。

山形県戸沢村は社会的・自然的資源に乏しい山村であり、その存続のためにさまざまな「よそもの」を受け入れてきた歴史をもつ。昭和恐慌時には「救村運動」を展開するキリスト教徒を受け入れ、現在は「外国人花嫁」を受け入れている。キリスト教徒等、歴史的な「よそもの」受け入れの歴史は今日の「よそもの」（外国籍の女性配偶者等）受け入れとどのように関連し、それは今日の同村の多文化主義的思想や施策にどのようにつながっているのか。これを社会的に考察し、地域社会における異質性受容の条件に関する知見を得ることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

昭和5年の同村のキリスト教開伝以来、村のキリスト教徒たちは様々な社会運動を展開して地域づくりを試みてきた。宗教的マイノリティと地域づくりの間にはどのような力学が存在するのか。ここでは村のキリスト教徒たちのライフヒストリーを資料としてまとめる。そして、そのキリスト教徒の理念や運動と今日の国際結婚のつながりを明らかにするために、聞き取り調査と文献調査そして様々な活動への参与観察法によってデータを収集する。

4. 研究成果

(1) 調査地の概要

山形県最北部の最上郡に位置する戸沢村は人口約6千人の山村である。その面積の8割以上は山林原野で耕作地は6%ほどだ。それに寒冷な気候、降雪量の多さや日照時間の短さなどが加わり、恐慌や凶作にあえいできた東北地方の中でも特に貧しい村だった。

そんなかつての「寒村」が現在「日韓友好の村」を看板に掲げて地域おこしをすすめている。例えば韓国文化のテーマパーク・高麗館の建設や村の特産品としての「戸澤流キムチ」づくりがその象徴だ。

この戸沢村は「村の国際結婚」を導入したことでも知られる地域である。同村は「嫁不足」問題を解消する方法として、平成元（1989）年に行政主導で韓国とフィリピンから「花嫁」を迎え入れた（後に中国からの女性配偶者も加わる）。行政主導のこの婚姻施策の実施は同年だけだったが、翌年以降も民間の斡旋業者などを通じて外国籍の女性配偶者数は増加し続けた。平成19（2007）年、村内に在住している「外国人花嫁」は33名だ（韓国出身者10名、フィリピン出身者10名、中国出身者13名）。

このような背景のため、同村の高麗館建設やキムチづくりはこの国際結婚が原因であると考えられやすい。実際マスコミなどもその文脈で度々報道してきた。しかし、実際はその経緯はそう単純なものではない。

朝鮮半島の文化を軸とした今日の同村の地域おこしや国際結婚は、それだけで独立して誕生したわけではない。その背景にはキリスト教徒やその活動に影響を受けた農業青年たちによる昭和初期からの地域づくり活動が土壌としてあり、それらを踏まえて考える必要があるだろう。以下、それらの活動の概観をみていきたい。

(2) 村のキリスト教徒たち

近年、戸沢村の地域づくりにおいてこの国際結婚が注目されてきたが、歴史をさかのぼるとこの村は昭和初期の恐慌の頃から、キリスト教徒の社会運動による地域づくりがなされてきた地域でもある。昭和初期に村の若者2名がキリスト教に改宗したことが発端になってキリスト教をひとつの軸とした地域づくりが始まった。

①パイオニアたち

現在の戸沢村役場がある旧古口村は自然条件に恵まれないため農業は振るわず、「窮乏村」とみなされていた。昭和9(1934)年に古口村は農村更生協会より指定村に指定される。そして古口村は「モデル村」として「上からの」貧困対策が施された。その様々な官民の活動の中にキリスト教による「救村運動」があった。

古口村でのキリスト教開伝は昭和5(1930)年秋、アメリカ人宣教師C.D.クリーテによる。彼は十字架の書かれた提燈を手に路傍伝道を開始した。クリーテは、路傍伝道の後、関心をもって集まった人たちと一緒に古口駅前にあった大和屋旅館の二階で、聖書の講義を行ったという。後に、クリーテと同じ山形六日町教会のアメリカ人宣教師カール・ヌーゼントも加わり「キリスト教救村運動」が展開されていく。

そのような運動に影響され、昭和6(1931)年、村の2人の若者が、現状を打破すべくアメリカ人宣教師から洗礼を受け、キリスト教に改宗した。明治45(1912)年に古口村に生まれた男性SNと近所の3歳年上の友人HQの2人であった。彼らは次第にキリスト教に惹かれ始め、共に受洗を決心したのだった。そして彼らは村で最初のキリスト教の受洗者

になった。村のキリスト教徒の誕生である。それ以降、彼らは産業組合運動、立体農業運動、禁酒運動などによる村づくりに奔走し始めた。

ただし、キリスト教が軸になったからといって必ずしも近代的／西欧的の価値観を軸とした地域づくりの運動が進められたわけではなかった。むしろ従来の村の論理を温存しつつ、賀川豊彦などのキリスト教社会主義運動の手法を「手段として」利用した地域づくりが行われたのだ。

しかし、村を改革する運動に協力してくれる住民も多かったとはいえ、当時はまだクリスチャンは村内ではまさに「異教徒」であった。彼らの活動は警察から監視されたり、刑事に尾行されたりしたこともあった。そのため橋の下で集会をしたこともあった。

村ではこの2人に続いて受洗する者が現れ始めた。そして月に1回、大和屋旅館で聖書の勉強会を続けた。

SNらが村の改革としてまず行った具体的な運動は、禁酒運動であった。それはSNによると「貧乏で希望をもてず、やぶれかぶれになって酒を飲み、路上で寝てしまう者もいた」村を変革する最初の試みであった。彼らは古口禁酒会を組織した。そしてSNらは禁酒運動を実践していく。

村のキリスト教徒たちは、禁酒運動に続いて古口村消費協同組合を立ち上げた。古口村には大正15年に保証責任古口信用購買組合という組合が既につくられていた。実際には全く機能しておらず開店休業の状態であったその組合を再び動かし始めた。

消費組合に加え、木炭販売組合も設立された。当時炭焼きは村の主要な産業の一つであったが、多くの焼子(製炭者)は製炭用の原木のほとんどを国有林の払い下げに頼らざるを得なかった。そしてその資金を持たない

大部分の焼子は木炭問屋や仲買人から資金を前借して製炭していた。ところがその問屋や仲買人は村内外の有力者（親方）で商店も営んでおり、焼子は木炭が売れるまでの間の生活必需品をもこれらの親方から何度も借り入れていたのである。こうした二重の貸借関係があるために焼子の立場はきわめて弱く、木炭は時価の1割から2割引の価格でも泣く泣く売り渡しを承諾しなければならなかったという。そのような親方-焼子間の従属関係が清算されないままに翌年に繰り越されることが続いていた。

その従属的制度を打開するために、昭和10（1935）年11月、古口に木炭販売組合が結成された。これによって木炭の販売が統制されて、それまで1俵70銭だった炭が93～95銭になったという。新しい販売制度により、国有林を焼いた製炭は、すべて組合を通じて販売されることになる。

木炭販売にとどまらず、組合活動はさらに展開していく。たとえばSNやHQらは臼摺り機、製粉機、そして精米機の3つの機械を揃えて14～15歳の者たちにも手伝ってもらって夜作業を始める。また農村工場で下駄材の製作も開始する。最上郡は、国有林がその林や全体の約7割を占め、耕地が限られており、また農業以外の収入も木炭や山菜に限定されていた。そうした中、農村更生事業の一環として農村工業が推進され、各地に農村工場が設立された。

また、SNは組合運動のみならず、賀川の立体農業論にも影響を受け、さまざまな試み始める。立体農業とは、水稻単作依存の農業から脱して多角的に営む農業のことである。立体農業論は、組合運動と共に賀川の農村改革運動の支柱をなすものであった。

SNの家は農家ではないが、自分で賀川が勧めるとおり和牛、豚、蜜蜂、山羊などを飼う

ことも試みた。SNにとって、キリスト教の農村運動は、まさに村を改革する「手段」であり、それは賀川の理想郷である「乳と蜜の流るゝ郷」へ自分の村を近づけることであった。

その後、SNは昭和16（1941）年に戦争に召集され、戦後3年間のシベリア抑留生活を経て、昭和23（1948）年に復員した。復員後、SNは再び古口村農協協同組合などに「死んだ気になって」精力的に取り組んだ。農協だけでは自分の生計が成り立たず、農協共済の職員も兼任した。昭和55（1980）年、村の助役に就き、公務に専念するために農協を退職するが、それまでの間、山形県農業協同組合参事会の会長も務めた。その村づくりは長男に託されていくことになった。

②キリスト教の後継者たち

その後クリスチャンたちの村づくり運動は次世代に継承されていった。若いクリスチャンの中には、アメリカや東京の農村伝道神学校で学ぶ者も現れた。彼らの手によって1970年代初めには農業経営を学ぶために村内に農業青年会議所が設立され、1980年代にアジア・アフリカの農業指導者を育成する栃木県のアジア学院の留学生たちとの交流が開始された。そしてアジア・アフリカからの留学生による戸沢村の冬季農業体験が始まった。

その過程で、韓国のある農村のキリスト教会が日本の農村との交流を希望しているという知らせが舞い込んだ。実はその韓国の教会の牧師は戸沢村の第二世代クリスチャンの一人がかつて1960年代に東京の農村伝道神学校で共に学んだ仲間だったのだ。そのような偶然の再会も手伝って、1980年代後半にその韓国の村（韓国忠清北道堤川郡松鶴面）と戸沢村の草の根国際交流が開始された。両村が共通に抱える冬季農業の振興問題など

を中心課題とした相互訪問が始まった。

平成 2 (1990) 年に農業青年会議所は戸沢村国際交流塾へと改編された。農業青年間に限らず、松鶴面との児童交流や女性たちによる食文化交流も始まった。同塾は行政の縛りから自由に運営ができるメリットを重視し行政の支援を仰がずに活動を開始したが、平成 11 (1999) 年には戸沢村国際交流協会と名称を変更した。現在は、より積極的な行政のバックアップを受けて活動を継続している。

(3) 国際結婚の推進

他の過疎地域と同様「嫁不足」に悩んでいた戸沢村は、施策としてまず昭和 62 (1987) 年に村の産業振興課内に結婚相談所を開設する。仲人には謝礼金を支払う制度を設け、結婚推進を図った。しかし、他の多くの自治体同様、この制度も捗々しい成果を挙げることはなく、他村における国際結婚推進事業の例を参考にして同村も国際結婚に踏み切ることになる。

昭和 63 (1988) 年の村長選において「後継者対策」を公約の 1 つに掲げた候補者が当選する。その翌年 1 月、村の職員の中から国際結婚推進の専従職員を任命し、同年 3 月にはその担当者が韓国、フィリピンを視察している。そして同年 4 月には「後継者対策」の予算を正式に設けることになった。

その後、村内の独身男性の名簿を作成し、ダイレクトメールを発送して国際結婚に関心を示した者に面談し、候補者を選抜した。そして平成元 (1989) 年 6 月から 11 月にかけて村が仲介して韓国から 3 名、フィリピンから 2 名の女性を受け入れることになった。他にも民間の業者を通じたりして、この年だけでフィリピン人 2 名、韓国人 7 名の「花嫁」を受け入れた。

戸沢村は、日本語教室の開催、韓国人妻の

家族向けの韓国語教室、外国人妻向けの保健指導、法的手続き（在留期間・資格の更新、帰化申請等）の支援など、外国人妻支援の行政サービスで知られており、外国人妻のケアの「先進地域」とみなされている。そしてこれらの事業は、文字通り試行錯誤を経て現在の状況に至ったものであり、まさに手探り状態で外国人定住者のケアの体制づくりを進めてきたといえよう。

前述の歴史的なキリスト教徒たちによる救村運動と、この国際結婚の連関は必ずしもまだ明らかではない。確かに、この村は貧しかったがゆえにアメリカ人の宣教師や農業指導者など様々な人たちが外から村にやって来たり、村からも出稼ぎ、奉公、留学のような形態で多数の人たちが村から外に出て行き、別の世界での生活を体験した後、再び村に戻ってきた。国際結婚推進の村の専従職員もキリスト教徒であった。このような諸々の要因を勘案すると、昨今の国際結婚は突然生じたことではなく、それに結びつく土壌は既に村の中に存在していたと推論することができる。

(4) 高麗館

平成 9 (1997) 年 7 月に竣工した高麗館は、朝鮮半島の文化を物産品や食文化、農業など様々な側面から紹介するテーマパークで、戸沢村の地域おこしの象徴だ。それは韓国の食品・食文化や工芸品などを紹介・販売する「物産館」、韓国料理を提供する「食文化館」、韓国の風俗を紹介する「民俗文化館」などから成っており、それぞれが回廊で結ばれている。全館が 12 世紀の高麗王朝時代の様式で建設されている。

戸沢村がある山形県最上地方は「モモ（崖）のカミ（上）の地」というアイヌ語が語源となっているといわれ、同村は最上川をテーマ

にした開発基本計画「モモカミ・アルカディア構想」を平成元（1989）年に策定した。それは効率化・合理化の追求を反省し、農村の生産・生活のリズムを見直すことを理念とする。そして同地域の文化のルーツである朝鮮半島との交流による地域発展を意図している。その構想を受けて、平成4（1992）年に高麗館建設計画が策定され、平成7（1995）年から建設工事が開始。平成9（1997）年7月に竣工した。敷地面積は12ha、総事業費は約10億2400万円で村が起債で賄った。運営は村と民間企業24社が出資する第三セクター「戸沢村産業振興公社」が当たった。

この高麗館の建設は、近年韓国から「花嫁」を迎え入れたことが直接の原因であると一般的にみなされており、マスコミ報道にもそのような論調が目立つ。しかしこの建設は同村における昭和初期からのクリスチャンたちの活動なしにはありえなかったのだ。すなわち、高麗館はこのようなクリスチャンによる韓国農村との民衆交流を土台とし、近年の国際結婚の増加による「内なる国際化」の課題へ対応するために建設された。注目すべきはこれらの国際交流は行政主導のそれではなく、民間の草の根交流だったことだ。特にその根にあるのは昭和初期から展開されたクリスチャンたちの地域活動の蓄積だ。そして平成元（1989）年からの国際結婚がクリスチャンたちの活動に重なりあっていく。

（5）異質性に開かれた村？

果たして、異質性を内包した戸沢村の地域づくりは何を提起しているのだろうか。なるほど、1960年代までに日本社会の基底をなしていた戸沢村のような農山村共同体は、それ以降の高度成長期の全国的な産業都市化の促進によって解体されてきた。「村の国際結婚」はそのような「上からの」国土計画の

結果に対する「下からの」共同体の再建の企て（あるいは抵抗）とも言えるだろう。しかしながらこれは果たして「市民による」「開かれた」新しい公共性なのか。あるいは「外国人花嫁」という外部からの新たな成員を（資源として）受け入れてはいるものの、依然としてやはり「閉じられた」共同体を再生する試みなのだろうか。

確かにこの事例は、異質性に開かれた「多文化共生社会」建設の可能性を示唆しているかもしれない。しかし、広い意味ではこの村は昔から異質性を取り入れながら地域づくりを行ってきた地域であり、ことさら（狭義の）「多文化社会」に着目することは、他の多くの事例を見逃すことにもなるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①柳原邦光、韓燕麗、仲野誠、野田邦弘、「地域学」を創る、地域学論集、第5巻第3号、Pp. 253-276、2009年、査読無
- ②仲野誠、おもい描く力、架橋、第18号、鳥取市人権情報センター、Pp. 54-59、2008年、査読無
- ③仲野誠、「公共性」概念についての覚え書——東北のある山村の事例から、鳥取大学地域学部・公共性研究会報告書、Pp. 39-50、2007年、査読無

〔図書〕（計1件）

- ①光多長温、藤井正、小野達也、相澤直子、永山正男、坂山高朗、家中茂、中村英樹、山下博樹、筒井一伸、馬場芳、仲野誠、片山善博、地域政策入門、ミネルヴァ書房、2008年、Pp.271-297

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仲野 誠 (NAKANO MAKOTO)
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：60301719

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし